

令和7年度 カタクチイワシ・ウルメイワシ太平洋系群 資源評価会議

日時： 令和7年8月5日（火） 13時00分～15時35分

会場： 水産研究・教育機構 横浜庁舎講堂（Teamsによるオンライン会議併用）

参加機関：24機関 参加者：74名（有識者含む）

【カタクチイワシ太平洋系群 資源評価報告案の説明・検討】

水産研究・教育機構（以下、機構）から、カタクチイワシ太平洋系群の令和7年度資源評価および漁獲管理規則に基づく将来予測結果について説明がなされた。なお本資源は2025年1月よりTAC管理のSTEP1へ移行したため、今年度より報告書の様式が更新されている。資源評価手法等には大きな変更はなかった。

ここで、参画機関からはVPAによる親魚量と卵数法による親魚量では、時期の違いがあるにせよ卵数法による親魚量の方がかなり多いように見えるため、チューニングには漁場外に産卵場がある可能性を考慮する必要がある点指摘があった。有識者からは、2024年級の加入量が2021年級と同様に過大推定となっている可能性が指摘され、この背景としてチューニングのパラメータ（ λ 、 b ）の値を毎年再推定している影響が懸念されるため、これらの値が安定的に得られる手法の検討が課題として挙げられた。機構内からも、チューニングの非線形係数（ b ）が0から大きく外れる点が懸念され、基礎データの充実を含めVPA以外の手法についての検討など資源評価手法の精度向上の必要性が認識された。

2024年級群の豊度に関しては、伊勢湾では2023年の方が0歳魚が多かったという状況が参画機関より報告され、機構の資源評価では用いている指標値が沖合域のものであり高加入期に対応した値であるため、沿岸域の加入量の指標値の探索の必要性が示された。

このほかTAC管理のステップアップに関して、試算依頼の有無についての確認があり、9月16日にこれに関連した担当者会議を開催する予定が周知された。また参画機関からの意見として、沿岸群の加入量指標値の探索などの結論をSTEP3ではなくSTEP2に向けての課題としてほしいとの要望が寄せられた。TACのステップアップの進捗管理に関しては水産庁が進めているものであるため機構として対応は困難であるが、本資源の資源評価の精度向上に向けた取り組みを着実に進める方針が示された。

本年度の資源評価案については、表現上の修正を含み承認された。

【ウルメイワシ太平洋系群 資源評価報告案の説明・検討】

機構から、ウルメイワシ太平洋系群について令和7年度資源評価および漁獲管理規則案に基づく2026年算定漁獲量の説明がなされた。本資源はプロダクションモデルにより推定された資源量指標値を用いた2系ルールをもとにした算定漁獲量が提案された。

ここで、土佐湾での親魚量の減少に関して、参画機関からはニギスと同様に餌であるオキアミの分布の変化が影響しており、親魚量の減少は見られるものの資源としては危機的と

までは言えないのではないかと、環境が変わって分布が移動しただけではないかという指摘がなされた。また太平洋では若齢が漁獲の主体であるが、漁獲の抑制が親魚の増加につながるのか、また親魚量の増加が資源の増加につながるのかという管理の効果について疑問が呈された。この点に関しては、管理の効果についての判断は難しいが、卵密度から推定される親魚量は減少傾向が続いており過去最低水準となっているため、状況として非常に不安であり、年齢査定などを進め資源解析法を検討していく方針が示された。またウルメイワシ対馬暖流系群の担当者からは、近年の産卵の主体は日本海側であり太平洋への流入はあまりよくないとの情報も寄せられた。

有識者からは産卵のピークの時期の変化が指摘され、これが近年の産卵量の減少傾向の一因になっていることが懸念された。参画機関からは親魚のサイズと産卵期の関連について、3~4月に産卵するのは15~16 cm程度の小型個体、その前の1~2月頃に産卵するのは18~20 cm程度であるが、23~25 cm程度の大型個体はもっと遅く5~6月頃でも抱卵しており、大型魚は周年成熟しているような生殖腺の状況も得られているため、大型魚の減少が産卵期の変化に影響を与えている可能性が指摘された。大型個体の漁獲は少なく分布や時期についての情報が乏しいが、これらの点については背景情報の整理も含め今後の課題として検討を進めることとなった。

このほか、環境の悪化の影響を受けた魚体の小型化についての懸念も示された。また資源評価手法に関して、担当者から将来的にはコホート解析への移行を検討しているとの方針が示された。参画機関からは、耳石の日周輪については既往知見との比較が可能であるとの情報、および資源の小型化は大型個体の減少が要因の一つであり、この原因として生残率の悪化による高齢の大型個体の減少の可能性が挙げられた。ここで、大型個体の情報は近年特に限られるため、サンプル収集への協力が呼びかけられた。併せて、対馬暖流系群の担当者からは、原因は不明であるが漁獲物の体長組成の小型化および平均体重の低下が見られており、特に0歳魚で顕著であるとの情報も寄せられた。

本年度の資源評価案については、提示案は大きな修正等はなく承認された。

【有識者講評】

情報の少ない魚種についても管理が求められており、またその対象魚種が拡大されている段階であり、担当者は大変であると思う。やるべきことは情報を蓄積しこれをもとに試行錯誤を繰り返すしかないと思うため、今後の努力や関係者の皆様の協力にも期待したい。